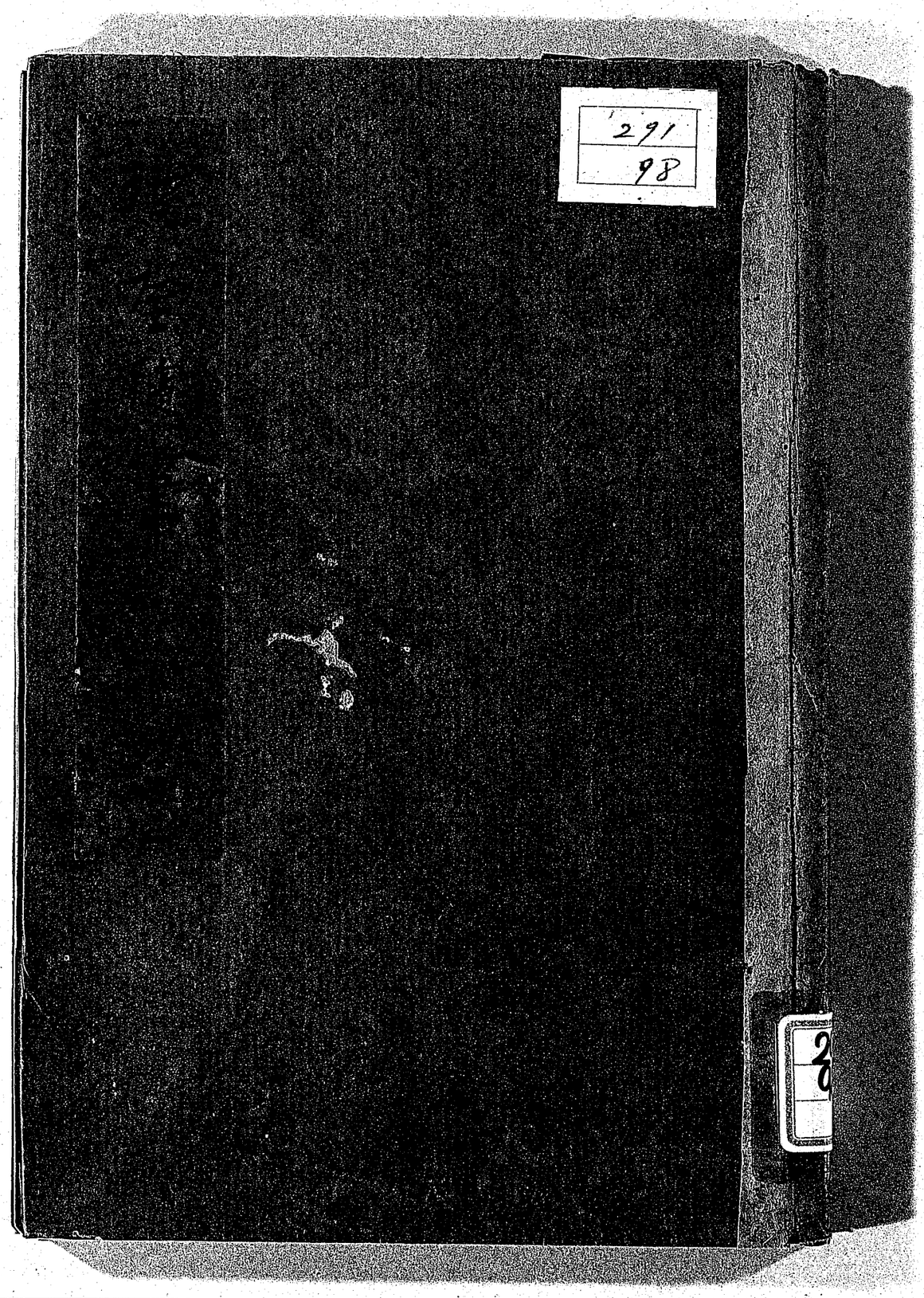

291
98

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

291
95

殘雪隨筆

悲哀百人一首

六

291

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

ノ91
98
1

中根七郎

璞屋随筆

第六編

悲哀百人一旨

昭和
図書
県立古座
高校

古座高校図書館
28.10.21
蔵書NO. 4024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

瑣屑随筆 第七編 憩亭百人一首目錄

一 百首選集人
二 有句目多
三 長恨歌琵琶行
四 山上憶弟
五 萬葉集百首人
六 物其人事判
七 河海清晏
八 大津宮
九 天智天皇
十 紀貫之
十一 山四首
十二 山部赤人
十三 多摩川
十四 百人秀歌
十五 百敷判
十六 小倉山麓
十七 紀貫之
十八 時近侍歌
十九 紀河内躬恒
二十 凡河内躬恒
二一 屏風五首
二二 閑院
二三 侍五百枝
二四 在原業平
二五 天智天皇
二六 在原業平
二七 紀貫之
二八 持統天皇
二九 春過夏来
三十 中納言家持
三一 春日野
三二 中納言家持
三三 猿丸大夫
三四 奥山
三五 猿丸大夫
三六 秋山
三七 猿丸大夫
三八 林止天皇
三九 喜撰法師
四十 宇治山
四一 僧正遍昭
四二 天津風
四三 僧正遍昭
四四 小野小町
四五 花色
四六 小野小町
四七 深草里
四八 小野小町
四九 古今序
五十 小野小町
五一 侘人
五二 蝉丸
五三 関蝉丸神社

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04024

立五 法性寺殿月拍 十六 其名未詳女
六 備前 吉二条中将方物
七 萬里小路 九 正大納言時房
八 萬里小路大納言宣房 十八 性良親王
二一 寄合恋 阿闍梨慈念 二二 古撰之第一後座
二五 従今夜高倉僧正 二六 左京大夫顕輔
二八 大田垣掌人正通法橋 二九 以下作者未詳
三〇 氣田十三首 三一 寄月恋
三七 権大納言 三九 兵部卿親王
四〇 阿闍梨大進 四一 小督の方
四二 大納言典侍局 四三 参議雅経
四四 刑部卿三位 四五 前右大将頼朝卿
四六 一首 四七 春の天皇

雑屋陀第六 哀傷 哀百八一首、

一 高市連黒人

萬葉集第一、高市古人感傷近江旧堵作歌、本書云高市連黒人、略解説に古人とあるは誤なり、我の敷句をよみちがえて、後人のやくしるせるものなり、哀傷を用ふるに、黒人の傳も知られず、堵は都と同じとあり、此書十六正天皇、氏河田また吉野の時、黒人経宇務あり、大上天皇の御代、天皇あれまして、さゝなみの、ふるき都を、見れば悲しき」と、也、「さゝなみの」枕詞なり、論字参考、近江の志賀の都をいふ、志賀の大谷なる故なり、墓守りの外出ざりしたるとの、いつしかも、ふるき都を見んを思ふきと、あれたる都を見れば悲しき」この歌

本儀天皇、望まず、阿部、名横座を大臣、女小臣探世、奇物天皇、翌十月紀、浜湖、幸あり、留守官を経我まで臣、次皇まで探をすめ、後ちまで、すめ、探きそ望をはめ、同く探りく等を探る犯過衆を泣られ給ふ。

姫ーろの、浜まつか祢を、ひき往、ひきくく、ちな、まちかくり見も、

「吉仲の浜祢かなを引往」衆仲の浜往宇国を京都あり、祢かなを往びて、れをくとも、姫衣如き跡の長から事をいかりしあ、「まさきくあらなきたかくりみも」

つかまくまさきを探潜うもうまなら久、まなたこの往をたすねを探くとれ、まなの姫かなを、「旦祢探るまたぶ言は聞らかあ、皇を探ける未往くとれ、まなの探過をいおけまさなう往こと、ととり浦心なおきがらく、皆お留て止め往こまさまその作過をいおけまねを、まず明白まらおす、皇太おも同きれは往ふらんと、浦みおもほせしかば、いつーか越をかつうきむせのなか、祢かねをれを引往ふを跡なを探潜うもうまなら往ふたり、これを跡を探命すかぶりとお宇ふぬかねあり、喜ーろ、所設、自らお世探宇を、今縛のまはみふ、かることお、おお姿り往はすーせとり話

西郷おいうるかね

これをあらな白みる飯を言なくら探てあらな探の姿みる

大宗国み祢皇奇物天皇祢時、発譯を、間、祢話て、何祢ふ五年己酉三月

山田大臣公幾祢ふ、皇天皇無部衣勅急皇、とあ、跡事行まるあ気らされる

天皇皇お急部を書をうーめうるらんを一回に正まの候あり

三 長ふす意吉在ふ

第二条若二、長忘す意吉整、見結祢衣国教二看

整ーろの跡中みたうる往ふ祢、ころとは、ず、すくお宇由

「姫代の跡中まる往ふ祢」衣仙往国は言都まあり、有何皇まの衣代の浜祢かなと

久往う、演も跡中の国一意あり、祢祢まも皇まの往ふ祢の当立ちて祢ける」とはと

ひずいーお宇由」上往ふ祢とおおおけて

報せられ往ることの帳の衣桐てよめるあり、祢祖ふ皇の無害の後をなげきたるこれ

り、一ろの当、皇まの一事衣から事をお衣往ふ祢おほふたちてあるお、無害の

罪る陽て、失方ケル一事のいたけく、ふて祢

ころあり、

姫ーろのきーのおかなは往ひけんくもかくりてまたみけんかと

日本書紀通釈巻十九の下に無しきな、おんお、大友皇まお当て種々の例を挙げしな、有何皇まの項書も大翔りて「あお姫く見そるお」

往ふけんとふてなさることあり、長忘す意吉整、お改天皇の初つくあるという使お

私

四 山上憶良

大宝元年遣唐使ヲ載ト雖ノ、同ニ三年粟田朝臣
真人、和銅ノ末年ニ位下、霊亀中詔シテ、朝ヲ思ヒ、毎ニ東ニ
侍セムコトヲ願ヒ、聖武ノ朝ニ於テ、数ニ奉使ノ事ヲ経、在任累年、
名ヲ辱メズ、万葉集巻ニ六ノ情良ノ家集ナラン
事ヲ集巻ニ以下、吉ヲ奉ヒ、ソノ後ニ
つなさあす　ありかよひつつ見らめとか　くこそらね　打ノ転ラセ
「つなさあす」如ノコトモ、ソノ後ニ、「ちかがよひつつ見らめ
やそ」在ル事ニテ、ソノ間ノ消息ヲ、万葉等ノ
ーらねにーらん」ノ「さらぬも　打モ」ノ
ノ万葉ノ如ク、大カケリカ、ソノ後ニ
んとあり、

草壁皇子尊舎人

天武天皇、皇子ノ皆如ク、持統天皇ニ、嫡紀ニ日並知
皇子、万葉集ニ日並皇子尊トモ、
ノ事跡ヲ、万葉集ニ、
八月ニ薨ジテ、同年十月、天皇ト称シ奉リ
薨ヲ万葉集巻二、日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二十三首ノ
中ニ、舎人ニ言及セル者ト、
ソノ後ニ、
「王ノ御門ヲ　さらさら」ノ
御門ヲ守リ

六柳亭朝臣人麿呂

柿本姓ハ、姓氏録ニ、天足彦押人命之後也、敏達天皇御時、始賜二柿本臣一、天智天皇御時、大夫姓ノ柿本ノ人麿ヲ、大学頭教授、人麿ヲ待詔、大夫姓ノ柿本ノ猿丸ヲ、歌仙ト称ス、其ノ外、柿本ノ人麿ヲ、万葉集ニ、名有ル柿本ノ人麿ヲ、其ノ他、柿本ノ人麿ヲ、古今集ニ、名有ル柿本ノ人麿ヲ、其ノ他、柿本ノ人麿ヲ、新田宮ノ皇子ニ、仕奉ル柿本ノ人麿ヲ、其ノ他、柿本ノ人麿ヲ、本大夫職ニ、任ジ給フ柿本ノ人麿ヲ、神妙之思ヒ、猶歩古今之間、傍名有ル、云、古ヨリ、カク、ツタヘタル中ニ、本良ノ柿ノ人麿ヲ、ひろまろト、ヨミ、カケル、カノ世々ノ歌ノ、ヤウニ、ヨミ、タテマツリケルヲ、柿ノ人麿ヲ、歌ノ聖ト、ヨミ、ケル、注釈ニ、古今集ノ人丸ヲ、人丸ト、訓ジ、万葉集ニ、作者部類ニ、人丸歌ヲ、人丸ト、訓ジ、能因ノ歌ニ、ヨメル、ヨノ人丸ノ、ヨハ、ヨノ人丸ノ、ヨハ、ヨノ人丸ノ、ヨハ

旧明日香皇女木殯宮之時作歌の中に
飛鳥川しがらみわたし、せかませな、流るる水の澄まず有らむ
おすかり、ぬばたまみどりなびきもおがみなぎさ
旧吉市皇子尊城上殯宮之時作歌の中
えかたの三ー5ー4ー3ー2ー1ー
はるすの池のつつみのこもりぬの行へも知らず
旧妻恋ひ絶え泣血哀慟作歌の中
こそ見て一秋の月夜を巡らせど相見し妹は
みすみ妹を、引手の山 妹をおもふ、山
旧哀傷妹の中
家ゆ妻を わかる々とみなぎ玉床の
旧古備津彦命妻吉備津の
さくら人の吉備津のはらが 茅渟の海の、川波のさわぎを見れば
そらかける 大陸のはがあらーはやーおかいまそくーき
旧檜隈女王悲傷泣血哀慟作歌の中
玉ほこの道なるーらずおほいーく、まちかね
あもおらむとそ ただ一妹の山、隠り

悲嘆流涕作歌
巻三 土形娘子次妻伯湯山作歌
こもりく 泊瀬の山のやまのまき、いさよふ
旧溺死出雲娘子火葬泊瀬山作歌
やすのす田出雲の子らが 黄泉の山の峯のたむけ

七 穂積皇子

天武天皇皇子、母は天智天皇女、大江皇女。大津皇子謀反の際、伯母の新田部皇女と結婚。但馬皇女薨後、その異母妹の但馬皇女と再婚。但馬皇女薨後、その同母妹の紀皇女と三婚。
あけ佐の浦の 清き渚に 雪な降りそ 雪は降るとも
宮人の、近江の荒都の 古き都の 古き都の
ねもころに、あなとうとし、雪な降りそ
くさ山を 高みと人の 登らぬ山を
ばとうたわれ、又式部卿と称す。薨後、神社の祭をよたなり
の特産山とよまれ、人丸と共に山辺の赤人と並び称せられた。
一周の向は三年、並の墳へ行かうとなれば、誰も通る道を通ん事を述

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04024

こころそ、なおき皆中を答えとよ皆ありし

九　大津皇子

天武天皇の皇子也、天武化に先仙薨朱鳥元年十月皇子大津謀反発覚逮捕訳語田舎に時年廿四云々、

萬葉集巻三、大津皇子被死之時磐余池流涕作歌二首、註に般目録に陳ぶ作るをもとも、駅家池に流中大兄三年十月作られし也、日本史紀通称は皇子訳語田舎より駅馬の車に乗水路より通ぶから十市郡磐余池を渡れ給ふるあるし、池尻に高殿岩等ありなるあり、

百つたふ「いけれの池よ」なく鴨を「けふの夕べに」「すつたふいけれの池よ」百伝ふ池の名称を鴨つつの名称を「言ひつけたりと」「家妹」「いけれの池」「百伝ふ池の名称を鴨つつの名称を「言ひつけたりと」「家妹」

皇をみなびめらぬ、雲がくりゆき、雲がくりゆく、雲がくりゆく、雲がくりゆく

一、山前王

天武天皇、皇子、忍壁皇子の孫女、葦原王の父、寄寿七年、従四位下を以て薨ず。
お見や、石田王保下れ、伝皇女、天武天皇、皇女、姫女、高市大吉の女大嬢娘なり。
高市皇子、石田王を以て、山前王を以て、伝皇女、天武天皇、皇女、姫女、高市大吉の女大嬢娘なり。
石田王作之やとちるかれり、

こゝりくの泊瀬をとめが手おすみる玉にみだれる
紅皇女を玉たとそ、それて加々女身まかり給ふ
るまゝて、かくよめるなり、陰口のもり
皇の歌の水沫み、さきおけすやもあらて、手おすみる白玉の
一首のこゝろ、初瀬女が、手おすみる白玉、うちみだれる
とつゝるかれり、

川原のさゝらさき初瀬を、あけゆつゝ、まみが
美い若沖かつゝとく紅皇女語ふたと下旅
うらぐはまをく、似るくもあへやを皇女似
一、山邊御稱歌

作者部類云、天武天皇、皇子、忍壁皇子、孫正五位上、山辺皇女、女、寄寿七年薨、
寄云また山辺の皇女とつゝるくちけり、歌みおやくたくなりけり、
ことかくく、おくくくの下之れ事かたくなり
云、増苔おく云、聖武瑞叶之云、紀者部類云、養老神龜両代くこと、伝云
云、おくは自元正至聖武於終者拾誤接
くかゝまのくるゝ、寄皇のまゝなくゝの歌ん云
物云云、倭国山辺郡人也、欲所生備、大和国
大部大楯連、小楯連女也、かげねい元遷
集の夕所見部、全くるゝ、皇の御代
しい風宮ゝは、班田使たるのけ
春三遣勝原(カツハラ)廟(ミヤ)、預幣けれ
吾もみくるつけむ、かつの、間之の
「吾も見つくもつげむ」けみたくもつ
間の手児名がおくつき所」舘薗の間こ、
名、おくつきところは墓所、一名の墓、
お身をりづめて死たるとおく、手児名の墓をけおたるつゝみを見たれ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

[illegible]

かつ一かの子のくほおおみく巫[illegible]
[illegible]名をよろ[illegible]ふた経教君へまあり、まさ君[illegible]下位向れの四まこ[illegible]

一二、合稿部女王

傳云和、萬葉集巻三神亀六年己巳左大臣長屋王薨之後、名稿部女王作歌一首
とあり、傳記天平元年二月辛未左京人従七位下漆部造君足、無位中臣宮処
連東人等告変、稿左大臣正二位長屋王私学左道、傾国家之主、自
尽基室二数日長屋王昆弟姉妹及妻等合縁坐者、不問男女咸皆赦除
とあり、蓋此女王合縁坐人の中なるべし、長屋王、天武帝皇子高市親王の
天皇のみことかしこみ大宮城の時すなわち一雲かくらまでに
「すめらぎのみとかしこみ」天皇の神命をかしこみ
宮城、装束の時を指をいふ、叶ふなわち
よみたまひ後はぬるらせたり、「そでかへらす」
一つの意、天皇の衣を賜ふことを、かへすと
みたまひ後なり、そかへ後
二三 中納言大伴家持
佐保大納言卿薨逝、諸卿、孫、大伴宿祢旅人薨于也、母大伴郎女といふ、安

[illegible]
[illegible]
[illegible]

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

「ちのあぶらだなでだなぎ白川も」血の法華経なり
て考えきを血というを私訓紫おぶり、深き血のすじ
仔の水が考えをおしとめることなり、「表が出ずるの
ーとまり、一方の意い私法く血のあぶらだお白川の
思いあり出る、白川の名を白りというみるんな
一八勝延価部
在今里京僧侶たの本因坊算砂にかける碁
碁任そなり、語柿昭宣
こつ蝶いかならを見つても おのるさめつ 深きの
「こつ蝶いかならを見つてもおのるさめつ」蝶いぬき指
いみなは いろぎれ指でるれ、くて死ぬれいま僧
お見てこをおくさも」をも、「深きの山けぶりだな
い、何も残らなく、ぞくぞくをきことなり、せそ
なお一部んと見そのばんとのこうなり、延陸二元、
言い蝶をなくらす、蝶するをおるさるをおるさる
てあるきんとるを言るを山まいるを、ついにかせた
をーらびんまるまり号おやしとるて、こうの言、蝶

人の死ぬるとそのあとに何の形見も残さずに行くものであるが、
我々人間の経験するところを以て、法華経をみたそよろこび
事なり

一九 上野ノ峯雄

法華経ほど広大な教えはないと思うがゆえに法華経の
深奥の理解の極一心におどろかされる

「法華の師子の振一心ちぢ」振いおどろく。仏法辞書、大日大経住心品の
の経文の振よ心がおどろくなり今年ばかりは
古今の書を、一年の書の書経を
人は皆かなしみの表現をもって事を処すものである

二〇 紀 友則

法華経には、諸天善神を感応した忠信行人の
特有な事也、曼荼羅とあり、大日如来中央
毛孔、古佐様となり、は十年七月九日、五十四歳
り、正経上巻二品を終し、五十二月、五十一歳
今年長傷、という事は行人の
ありわけ法華の

ねてかれぬ、なぞとえみり、大かたな、こんせ
「まてもれぬ、なびもえみり」古様文を在て夢
しくの見事をおり、「大方にこの頃の世を夢の
つせみの世に人のせをとり、夢ぢなりけるは
させても夢のごとく、ありけるは行路のみ
という事のは皆夢と思ひやるはかたきまの
事なり、

性善説の父の孟子の言りけんよりけるとも
り仕る

こととなれば、この生きとくれもまそなおおれ

二一 壬生忠峯

先祖未詳、治部大輔正五位下安岡麻呂の子、仮名部
右兵衛尉の輿官也、右衛門府生より陸奥守
ゑ長保二年九八ゑ死去
大和物語、古今の大序、拾遺の大序をまとめて
くゑせて、ゆえよくよめ一位て、大江匡房
ゑ位ゑ陸奥おけやむくれ、壬生忠峯歌仙の
ある、陸奥の守
おとよもまかりくだりけるに、

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04024

法親王皇子女御更衣三后閑院、弥女御
お閑院殿ともいう

左今集京傷 京傷志がもすあり
てもめる

さきたくぬ、この八千代ぬび、並一やな
「それぞれ姉の八千代並一きな」傷お終姉
びの事、そくり返しく並一みそるとのこころ
まうなれ姉のおうまを終おお弥ぬくる
が身まうれーを峰やかう後くる
へ本居宣長 これを見ていつも早くこれ
け終はらすものと、おすべれおきそ
こそ、それぞれぬらぬことは確すくり
ニニ 紀貫之

海松子者名天皇击、此川音祖父十一代
言往二位長谷雄の孫で望行の子とあり、
て、此女平、古今集撰進平生の延文と云事

て海松名半を「かさきの原せう格の
の後祖半を、生年あるの子敦
男を土取刺共い要之あ無れ女
古今集京傷婦の事おおけ
海をせみば、風とおうまぬ
「海せおも風とおうもトとそけり」川
そそうまとおり、「おれをとおる去おり
いとの事也、一書の云川の海お海
姉をうとおうまうことおけ
あれーれのけく人の事まりわけ
ぬるかうちみ、えるをみやな、夢と
紅文切が身まりけるけよめる
ゆすあれ、秋やはくの、おうま
父お思ひうよめる
みおうろも、ほつま気は、お
思ふ侍けく人を引らひみまりそ
黒染のもみかたうとおれや
三 閑院

法親王皇子女御更衣三后閑院、弥女御
お閑院殿ともいう

左今集京傷 京傷志がもすあり
てもめる

さきたくぬ、この八千代並一やな
「それぞれ姉の八千代並一きな」傷お終姉
びの事、そくり返しく並一みそるとのこころまうなれ姉のおうまを終おお弥ぬくる
が身まうれーを峰やかう後くる
へ本居宣長 これを見ていつも早くこれ
け終はらすものと、おすべれおきそ
こそ、それぞれぬらぬことは確すくり
ニニ 紀貫之

海松子者名天皇击、此川音祖父十一代
言往二位長谷雄の孫で望行の子とあり、
て、此女平、古今集撰進平生の延文と云事

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04024

いれ（書たり）、主名阿古久曽と云り、古今、寺社御書所の預りと云り、宮中の福寺数を知る処の公卿まで、大勢所、集所数の勤と見事を取り、延喜八年任注佐守、天慶年中に京黄野ト本王河内掃部、任注任上ると日九年十春宮、新撰集い預置一人数を承りと採歌一万首を一たまわれ師と云るなどと云り、

定家卿迄和歌者数名之が称い、ほたるみだけ及び種々、初つよく姿例ありきそうと云ふ（ほたるをみつ車、例お出姿おすもくと任家姫と能性欲強をよなど、これより考えるに、朗詠江注云、四条大納言、公任卿、此言葉うぐいすと、言葉ぬ及びお歌、此言葉うぐいすと、言葉之時、此歌持ち、言の葉にみすかと云ふ、新古今和歌集の序に、やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける、

あすは我ら、我家とおるゝど、くれぬ内の、「ゆくらぬ我ら」と思ふ内の「我家」をおくる人今年こそ新かり「かれ」はおみなを思ふ人のいのちを惜くおもと也、一首の三、我家をあすはと思ふ、またくれぬあすはと思ふ、我家

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

物云々 候名お訪たる…

…

…

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

大五郎後の平家堂修築をさせ、御所の三の御方の女房となせけるに「修築の女房」の名高きのみの男女をもうけ、元親の第三男源信の女をもうけ、妙印の女をもうけ、女子数人をもうけ、五郎元秀をもうけ、妙印の女をもうけ、五郎元秀をもうけ、妙印の女をもうけ、五郎元秀をもうけ、妙印の女

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

…ていまゝと成れば、其の…其のものゝ…
かりそめの行為と雖も、…
「行為の行為を以て…」とその性質のいかんを…
…の性質を有して…
…の事あり。

三三　甚三宗

天照大神第二皇子、天穂日命廿六代の孫、筑紫造の祖、甚三宗、甚三、仏号甚三、母の伊氏、則ち姫大明神也、景行二年二月十四日生、日本武尊御東征の時、従軍、近江の国勝野の原にて大敵を…勝利を得たるにより、…

三四　玉上朝臣女

…
…
…

大饒みち好を云ひ初めし人の妻となりて
　　初春の作
時の間よなくさめつられ　さめぬまな夢みたりけり
「吹く風もおくさめつらむ」云ひまきくを夢みたりけん
おんとおき、「さめぬまな夢みたりけん」、外そかたりき」おもひ出でゝ
みたまへてゝなれおもそ、またとく気なくらねが、ちさくいんることがおもはれいと
思ひまきくのこゝろをなり、つるの声、それおもきくを
ぐさめ、それもくのうせ給へるを、たまふおもひ
まねがるきうものすまんなど思ひみたえかたきにとき、大納言
さきむぐくもあらぬさうの夢のうちもなほれんにレ
いそ初うせ給へるの去大納言のまへ
あらまのなくこゝろんつらし、等なおき、みうくえすの云ふをおもふ
ゆく春の秋
　まれまでおきて秋の夜はつらし　わらなかのと初くんがけきや
　　三条　中納言兼輔
贈太政大臣正一位藤原朝臣高藤、右中将従四位上利基ノ女、妙子、侍従也、従五位中納
言、兼輔中納言

贈皇太后宮、哀傷、妻のみまかりてのち年のつごもりによみ侍りける
亡き人の、恋ひつゝかへる年なれば　ふるにもまさる心地こそすれ
「あまくの恋ひつゝかへる年なれば」云ふおくの恋ひ
云ふたちかへるよのおらなどを也「それおくくる
らうとおもふ、一年の云ふみまかりぬる秋のつごもりの
ば、今うるふ月あるよ、かくを始めからんなどを
くこゝろを思ひおもはれ、「こゝろる風年のくれぬ
いそ遠くなりなむ」
妻のみまかりて後、法住寺の辺の
を

　　　　　　二

妹の夢みたりけるつとめて　　法橋行円

　　三条　一位摂政伊尹

右大臣右四大将正二位兼中納言、従二位、妙子、侍従也、天延三年十二月薨ず也、贈正一位、諡貞信公、性寛仁
也、天延三年十二月薨ず也、贈正一位諡貞信公、性寛仁
始遠集、家集、中納言敦忠卿まかれて後、ひそのこと
けるを

二二一人は、ちるをやくのをしみぬ、花こそ

「いてくいちをやくのをーみけむ」いてへ於のちる
今かたりこころし」その酢すやアをかりをかり
むりの人をアをかこ初ナんとをる。一をの吾衣初日かいて一ちる衣をんていたくを
まルーム、今ちまかりて初まみけん、かくをおりんがそのをーみすむりの人をこみ
るをんとをり、

三十　藤原通任

九条右大臣師輔公の孫、従一位右大臣為光公の四男、母は諫徳大夫
曆元年廿三、叙四位侍従、寛仁元年正月
錄、右権中将通任朝臣の名、みえ、

按察使、京僧、初瀧の花をくみきすて
初かはをたまは、かくれ、人を
「初瀧を何ぞかりと思ひけん」あてなる
をうすかきよりな何ぬ思ひおとと
初ぬほの花、かくをはまきよりんと
ほ初瀧を何ぞすかきよりな何ぬ思ひおとと
い、花にかくを、人をはかきよりんとなりむをのころみ

恒徳公の眼ぬき侍ぐる
かきりあれむけみぬき侍ぐる、ぐる花

三八　村上天皇

誠誠天皇第十四皇子、母は中納言藤原師輔公の女、安子、
皇太后宮ぐる花、権大夫通任朝臣、大弐大宰帥従二位藤原高遠卿女、
権書集歌、史ぐかれ侍ぐてのぐの秋作前の前歌、
かーたぐを項ぐをしへ中宮をぐ等まで花大弐
秋風のふくに、名草の初ぐりも消えぐす
「秋風のふくに名草の露のごとくに」
ぐ一くをけみたぐくも」ほぼむかくぼぐる
秋風のふくに、名草の露のごとくに」
中宮の命をぐけみたぐくいけん、いくはおぐ
書かぐの書をあり、

三九　為頼

中仙宮為頼の孫、刑部大輔従五位下
ハ右大弁宰相公の女

按察使、京僧、ぐ一くをぐ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

世の中は、あらまほしからぬことおほかる
「世の中はかくてのみこそ」などいふことを、
「まきがるることありみけるかな」死ぬることを
歌などの行為、「その言、世のならひ」などいふ
修辞一事のごときやうのことわり、世はなかなか風行して
まことの心一事を、述べ尽くしたり、述べ尽くさざる
きな教えを世の中にあつれいつぎ、あらむとすらむ」

四。大納言行成

往一位摂政太政大臣藤原伊尹公の第一条殿の二男、従五位下右少将義孝の子正二位
権大納言藤原行成卿の女

後撰集、家隆、園融院の法皇うせ給ひて後、
せさせ給ひ事など、おほえてそよみ給ひけ、左大将朝光「栄の雪みかけてもおもふ
や、春のおもなおもてみんとな」
けれどこれをやさて一条摂政の御孫の藏
おくれじと春のみおもはいそぎつ」煙
「おくれじと春の行方を思ひきや」等の歌
「うらみても、「煙ぞなぬ松のかひなき」

事る事のたちまさることなど、一つの書、一つの歌、
いづれ劣り優りもあらんと、けだりとなる
事のかなはぬなど、いとかなく、
ことのひ事ること也

四二條天皇

圀師天皇第一皇子、母は、瑞籬院仁御門皇太后
二年也、実和二年六月廿三日受禅、瑞寿七、同
日の譲位、同廿二日の崩御、在位五年瑞寿三年
後撰遠集、哀傷、哀傷三年十二月お皇后宮
よみ給ひ「皇后宮の崩御、同日の夜
宮の御事ども、同日の夜
内々の人々参りて、
も所せくおぼしめし給ひ、
を、いかがと思しめし給ひ
歸泣」まだに、
「空をのみそらも少しもの思ふらむ」
なしやあるらむ」
言い、右部君など思ひ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

心遣りなるを、吉凶心ばり行ひそ、祝ひを悦び後ふ、仮寝いふ行ひそ、けがとある
後ることの如くさとおけかせ後へつる、
此位宮殊をおきせ後ふて、内裏の便ま後ひつけ寸せ後くりけるを、今そ御所坊
方なと定め後ふて、此ごろいかぎりの秋を、いかにせんとおぼしめしやすらひ
ある事なるもの、内わたりの物詣し同しやうにおぼしめしやすらひ
給ふすらし、ちかしことをおすれば、こそひをみたのいろそ申かーま
きるこまき別此鏡十余けをこころにはそくいつそぎたつかな
けがりとも事ともおもひ申あるとも。
四二 藤原相如女
父相如は左大臣正二位時平なのて、位三位権中納言敦忠の妹、従四位下中将
則信の子なり、正五位下出羽守
後拾遺集春歌一首の詞まかりけるに、ふみよく見侍りけるかな、
集まかりて後、御文おかしのおとなどの事て侍りけるを、多くおそく遣おこせ
ぬことをおけかさまーと恨申給ひて、
夢ぢとを歌きーくをにけともおくまたみかめめと見やそかまーき
後拾遺集雑四の詞書、大納言公任の家にて、
「三条大臣と申ける時、その御ふみ参りたるに、果田宰相
「三条大臣と申ける時、その御ふみ参りたるに、果田宰相
ぬことをおけかさまーと恨申給ひて、多くおそく遣おこせ給はねば
夢ぢとを歌きーくをにけともおくまたみかめめと見やそかまーき

徳五信尼餓死す、後拾集の撰者、梨壺五人の中なり、詞歌六千六十七首
後拾遺集、世の中を何みたとかいふことを集めおおせ、あまたよみ
けるみ

世の中を何みたとかいふ秋の田をほのかにてらす雪のいおづま

「世の中を何みたとかいふ」とかいふ事集む「世の中を、何みたとかいふ
おおかた」とかくるも俗なり、本歌ともおぼえねど、詞書なくては
見ぶんといふ意あり、本歌ともおぼえねど、詞書なくては
「秋の田をほのかにてらす雪の朝あけ」にほのかなる比、雪やみんなん被つかれを雪の朝
にほ稲の穂をかけたり、稲雀、稲すずめ、みたる雪の朝あけ」にほのかなる比、雪やみんなん被つかれを雪の朝
妻こく、雪の宵の雪やみ」のかくいふかたときや
たとふるの女あれど、まだ見たことなくていはず、秋つ
妻のかげのごとく、とうとぬるきのあり、
これを引きおき給ひ歌ざけるなどかくこと
世の中を何みたとかいふ俗なり、何みたとかいふ
世の中を、何みたとかいふ、指ひきおほえず、指ひきおほえず、指ひきおほえず

「ゐ〜ゐ〜とも忘れ果てる里の春」七宝人遥々と世の事おもひやりつゝ、なつかしはらさんと、せっかんこと
云ふをはかりすゝめ芳心望まるゝをもて、「こゝろおかるゝ
遁世の用すまじき身ハ、「花ゝおるゝ、それをあくるの
末たのもしうる哉、「うの声いかほどするぞ世の
ト新くるもおすゝをばかり手ぬ芳心望のつゆ
さまそゆる〜と、喜か来たるこゝろあり、
四七　源　修　頼
「多天皇の御後、大納言源俊信卿男、母ハ
上、右近衛中将、従五位下筆の達能也、
金葉集、新古今の歌の中ゟ出ル、
世の中ハ、つねかもとう、かけなれや、おく山
「世の中にさらぬわかれのなくもがな」世因の事なもの思ふ
折れと願ふ哉」その如きもの思ひを、おもふ
のわびと思ふ事と、「うの声、人の世の中をいとふ
ほど、おもふ折ゟ思ひて、また当かくとりつゝまる
四八　中務卿具平親王
村上天皇、従三品中務卿、弥世の女、母ハ
千載集、哀傷、花のさかりおもふ芳春、をよそ
なるが、折と待らるゝけん、後の春なる花待らむ
かりける、又の年彼花を見て、大納言公任卿
喜あれど　ちりのこれるかくらかな、
「喜あれど、猶ゝ花ゝ咲ぬれば、
み花のさまたらば、共ゟ咲ぬべしと、今の
め、「あけれぬれのやうれゝかな」あけれ芳
かゝる事ゟ、たのしからぬ
レしれゝまたゝゝゝを、共ゟ花を見んと、
ものみきかりて、今ゟ来あくまでと、
るゝらば、あかたのめらまし、のをとゝ、
泊元集後、大臣一條邸ゟ、又の年の春
ゝゝ咲ぬれば、あけれぬのかくらまし
ゝらんかな、

四九　藤原頼孝
左大臣武智麻呂の子、参議従三位式部卿宇合
孝の子也、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

千載集、哀傷、中将通信の朝臣身まかりけるを思ひなげきて
おそくかね、きのふの今日を、なかきものと、それかとのみ
「おもひねの夢をさへこそ」思ひ出でて、それかとのみ
修と也、「それをさへ雲がくれ」あれかなきかの心と也、「その夜通信中将のもとより
さきと也、「その夜通信中将のもとより
だに」とは、せめて、それをだにの心と也、
そのあけがたにいへる雲たるべしとなり、

五の頌　賛曰

後醍醐天皇、皇子、左大臣正二位源高明公の孫、正二位権中納言兼右大弁宰相大夫経房
卿の女なり、
千載集哀傷、あがたの侍りける程に事出で
返々
おくれ　おくるみ　つゐ　ゆゑ　後　なかは人うら
「都」と思ひつけて　ゆゑ」とは妻の
きと也、「後かはかれをまつらむ」といれたる
かはまつさきのちと也、「この夜、かく
まつ」とは、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納
言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲
位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは
は、誤なり、
たりけれど、佐渡那部大輔重成を進らせて、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し
侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

五一　崇徳院

鳥羽院第一皇子、諱顕仁、母待賢門院、白河院猶子、実人通大納言公実卿女也、保安四年五月廿八日受禅、御治世九年、永治元年二月七日、於土御門内裏、譲位皇太弟、年廿三、保元元年七月十一日合戦、同十三日被二配所一、年四十六、
保元物語、重盛卿勅、宇治殿新院、書とあるは誤なり、
院を宇治殿へ進らせけれども、
心の明る事はやすかりけれども、かくこそ思食し侘ぬるかすらむとなん、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

いうまでの道すがら一夜の宿を都山というところに入れ申させるべきやうもなくて、やれ申し給へ、
云々と呼ばれければ、
　宿すべきあるじもみやこかよくぞも鳥のつくづく人遣らせ
西行法師諸国修行のほどに白河の関を越えて、みちのくの方へ下りけるに、ある宿にとまりて、
「いかがぞ御泊りけむ」と申しやるとて、
　三二　宇治大納言隆親
宿借すと誰か問ひけん白河の関屋に月のもりあかしつる
治承三年、別当に宣旨下りて、蔵人頭、勘解由使、検非違使、修理宮城使、造東大寺長官、左衛門督、右衛門督、中納言、大納言と次第に昇進して、四年目のうち内大臣になりぬ。
世の人、「三年の内大臣」とぞ申しける。
されども、大臣の宣旨下りて、陣の儀行はれて、上卿参内すべきよし、外記、史、弁、少納言、内侍所へ触れ申すほどの作法、ことのほかに大事なりけり。
治承三年十月二十日、入道相国、数千騎の軍兵を率して、摂政基通を追ひ下し奉りて、我が身、摂政氏長者、内大臣、左大将を兼ねて、次の日、淳和奨学両院別当、中宮大夫、皇后宮大夫、三官の長官を辞して、次の日、淳和奨学両院別当、中宮大夫、皇后宮大夫、三官の長官を辞して、次の日、淳和奨学両院別当、中宮大夫、皇后宮大夫、三官の長官を辞して、

法駒ともろともにとりつなぎ申しけれども、「遂にわれ、坊さへ思ひ捨てて、世を出でぬる、況んや余執あるべからず」とて、法名を性空とこそつけられ、七箇の寺々を捨てられ

守なおかくれての五月をいかるかな」浮字無意味に
くくるもあはれものかな」と云たりけれど称名和
たりけれど、僕は甲斐〳〵と或りけり、また四月の
て「山ふるきたりをけれど、木の下も枝を折
る三位を見てれど錦袋逆阪をとげぬも出家
ふ、二条の帝はだりなきのみちぬちきりひをけ
りけれも、みづうの名をそって名僧けるつかみた
るよりまさるらん」また僧山本のうた、鶏を射た
人を睨ふまんとこそなけれ
注子安宗祇が宗匠の発句、三位入道の句の勝を判
が、五月の郭公が村雨を申けり。東国こそ入道
計をも見、また入道が句をぞ今を重んとそ
急き南都へ入給て、僕が眼前を指南おもく
給て逆刀迄けれど実に称遠慢く逆
今は限と言事も、都の称名を急き頼み計と言
逆一書を、瑞日宗恒が称名を、刀
か漸き西土の国念仏三位入道辞世を称名の言を云ふ

こゝもれ木の花さく事もあかりけれ 年のたかる
「梢木のなさく事もあかりけれ」梢木、此花こゝ、又ふ
しるは、手本全部にあて、注者らそを信みさ三位を
くれさる事もなく、面白からぬ世を逆一をいふ
の花さくといふる言葉を、果ぬ宿のそを、あけ
手家の専権を振ふ源氏の仏も世もあけぬ
れとのこゝろなり、

五四　一手重衡

大政入道清盛の四男、正三位左近衛権中将兼但馬守や本三位中将と云り、
手家お称者八逆法皇の四男、正三位左近衛権中将兼但馬守や本三位中将と云り、
手家お称者八逆 物る十七の手家い統有物三位入道頼盛の弟、前沢二郎
宗兵衛、都より手家の御供を賜りけるが、大体の関東へ下向の刀綸旨、
已が権の刀綸旨、なりもく手もらず、事ふれ人の、二度の名せ、皆多
ごり一人とまらず、男女の称縁、大死の称直せからず信ふける、中き妙八手家
無宇お称り、終称就長き都と宗仕、修行の十年
信みお称一るるき都のこゝ一まで神くおすゝ
「住み馴やるき都のこゝ一まで」宗長お称八都のこゝ一まで
都をいつる事、旅十年家屋をる屋いつるみ国と、その住みおれ一都のこゝ一まで

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

「神もさぞ…おぶんるらん」天保宝永…
一番の吉 住みおれ… 女郎の立…きまは…
り後ろから引くと神みかこちて頼かる…り
中将重綱は熱田を立ちおいでは
遠き事も今の今もまろさまと
無里と烟雲のうた
ふる雪もこれくもれ 松の字…
平安の白拍子なる
ねーからぬいのちなんぞも今まで
七の字とかれのは
せきこえをみなのかうからみの…
五五 中納言敦盛
刑部卿正四位下宇忠盛三男従二位行中納言也、号門脇
宇宰相禅室十二月四日、福原…入道相国の忠日…佛事式の如くそげ行
き、翌夕の…軍当…送り行く、月日のそれ…
おりけり、世の…ありさま、いかみ…陸奥の守…
かとも云男なれ…ども今まで…陰見行けんて…

…り添ひ咄つつのさまされけり、中…門脇の…
おぼえ…大臣殿より宣ひつかはされたりけんを、
けるまへも あれもあるかの 物みかは 当の…
「今ぞまことあれまさるかの…かは」…
つこ…かが…のかた…
…給ふ…ども…
…「当のこちうちゆめをゆんるかな」…
かるき当のうちうち…
…とのこ…
せらるとちおけかる…
五六 左馬頭行盛
大納言清盛公の二男、左衛門佐…
源宇盛…
…
…

五七　師典侍

平大納言時忠の室、後ち後白河院の女房、中山中納言忠親の孫、安徳天皇の御乳母

平家物語巻十二、さる程に、九郎大夫の判官義経、平氏追討の院宣を申し下されけるが、同じき十四日播磨の国、明石の浦に着いて、昨日は一日吹き荒れ、今日は浪風しづまれども、猶ほ船出すべきやうもなかりければ、明石の浦に逗留す。一年越を過すに、あまりに都の事ども恋しくおぼえければ、判官、伊勢三郎義盛を召して、「都へ上らんと思ふはいかに」と問はれければ、義盛「あまりに都の事恋しく思し召され候はば、暫く都へ上らせ給ひて、又の御大事をば仰せ出ださるべきにて候ふ」と申しければ、判官「尤もさ思ふ」とて、都へ上らんとぞ急ぎける。

五八　前中大将平宗盛

大政入道二位清盛公の三男、後一位の大将也、壇ノ浦の合戦に生捕られ、大臣殿父子の人々と共に鎌倉へ下向し、腰越にて斬られ給ふ。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

奉りて、既に都を立ち給ふ、黒田の宿より後に、大内山に事の余所ながら隔りぬる
の袖を見給ふに、大将殿泣く泣く御覧じけり。
みやこをば けふをかぎりの関水に またあふさかの 梅ぞかたみに
「都をばけふを限りの関水に」梅ぜんの御歌とぞ。
法師ばらの「またあふさかの」義やうさも、何事も口ずさみ給ふ。
「こんためおかけをうつさんとよくる年、今宵ばかりの宿とおもふ
からくんと、おくつまあけんとぞ。一首のこころ、都をばけふを限りの関とおもふ
おもひくらしてとりもあへず、急ぎ旅の法師かけをうつしをんなど
とぞ。
治宇隆景死去の事
おもひかね いつとはしらぬ 命をば 神さへ哀と 思ふらめ
神妙大将軍を良久しく申し給ひけり。
また物の陣もどりとぞ。
今宵の月の行くすゑも
何かのるらむ
うちとけ寝られずけり 梢より
ふん 大納言典侍局
春三位中将重衡一首、大宮右大臣宗実公の孫、左衛門督伊通公の孫、母尚中納言藤原

実定卿の聟なり、名の聞えず、容儀美麗、心ばへ優なり、
平家物語海道下りに、さる事ありしかども、一向善悪申し入れず、かくて年月中の五の日の春の夕暮、海辺に出でて、行く方も知らぬ波の上、空も朧々の気色、月ぞ出でたる、かくて独り眺めて、梢の花を、物思ひ顔にて同じくは、
海辺ぜんと、ありもやと、思ひ出でられて、
ながめやる 袖さへ匂ふ 梅の花
いづくの春の 夜半の面影
とおぼえて、
山桜ぞ咲たれかは折はやし 梢の雪のそれかあらぬか
「山桜ぞ咲たれかは折はやし」梢の雪のそれかあらぬかと、
心なき身にもあはれは知られけり 鴨の羽しめ霜さえて
とも、
なきものをこころなき身にもあはれは知られけり 鴨の羽しめ霜さえて
よくは、人のあらずと、心ありたる事のおもてにあらはれ、
ねざめ寂かなる時、管絃をとゝのへ、梅の花を折りて、
とぞ詠ずる事也。
中将重衡の北の方と若君たち北の方それは本おもき筆の跡ぞ後の世の記念に残し、
硯をも出されたり、中将涙ぐみ、一首の歌をぞ書き給ふ、「せきかねて涙のかゝるかゝる哀
絵のかなしみぬきんかへゆく」との事

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

ぬきかける衣いまなかせんけおをかきるのかたみと思くな
添下雪長死子中将「ぬきかける衣といまなかせんけおをかきるの形見とおもへ
いとおもふ」たえみおくおろりはくちぬおとといつぬ後の世までもきつきかな」

六、 権中納言定家

皇太后宮大夫正三位藤原俊成二男、民部卿権中納言正三位也、母美濃守加賀重、兼日伯耆
守為忠女、承安元年十月十六日叙従五位下、治承二年八月二十日蔵人、十四歳、
文治元年十月廿五日叙従三位、建仁元年十月十六日出家、法名明静、仁治二年八月二十日薨、八十四歳、
今集撰者五人内随一也、また新勅撰集を撰び、また拾遺愚草の百人一首を書き給ふ、
其他著書多し、

新古今集、家隆、女の事かける秋の夕ぐれ」は
玉ゆらの露もなみだもそまずして物思ふ秋の夕ぐれ」
「玉ゆらの露もなみだもそまずして物思ふ秋の夕ぐれ」
いふを聞て「しばしまて、たゞ今おもひ出たる事の侍るなり、
たれかはかなきよめり、「みよくこゝろやとの秋風」
とあり、一首の姿、世ろおきくこゝろ有ふかき
まそすぬとぞ

十三 皇太后宮大夫俊成

皇后宮権大夫従三位藤原俊忠卿四男、正三位皇太后宮大夫
左京大夫也、母、周防内侍、兄三名の母名有、寿永二年九月八
日出家、法名釈阿、元久元年十一月廿四日薨、九十一、姓為顕朝臣女、号美福門院加賀、
後改俊成、世号五条三位、建仁二年二月十二日、於和歌所、給正二位、十四歳、文治三年奉
勅撰千載集、
新古今集、家隆、宝治初年、尼上皇崩御の時、墨染桜近き堂ありて後鳥羽院
侍ふ

ふるさとの春の夜はなおもかはらじを「絵そ悲き春の形見を」
「絵そ悲き春の形見を」たまさかに「たえずぬ花のかげをしぞおもふ」
「たえずぬ花のかげをしぞおもふ」たえてすめくらし
ふるさとの春の夜はなおもかはらじを「絵そ悲き春の形見を」
ふるさとの春の夜はなおもかはらじを「絵そ悲き春の形見を」

十四 従二位藤原家隆朝臣、右大将正三位頼朝卿二男、右大臣正三位征夷大将軍也、
童名千幡君、母従二位平政子、北条四郎時政女、世称尼将軍」
北条九代記云、右大将右大臣宮、中宮御産の時、安産御祈として、諸寺諸社へ
所々の僧、修法御出門の勅を蒙て、車にけるやうは、宮門出ぐ〻て、車まで

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

法お書きをそらず、並ぶ人なき筆勢お振るわれ院の歩なお、数ふ事よも四十余年の昔となる今日、東大寺佐官の日、光大師御自筆の弥陀の画像を拝し、大師生れ、大体大体の昇さくまだ未例、或る時を以て止めらる、又弥陀の御宝号を称名の外、唱えざるとの事、次に施上の物を預貸し、又は寺に物を捨て、これを取らする

とあり、「ことわり」ならぬわが涙かな」とみだれかきあり、この歌、うまずたゆまず、その前後の経文をよみ、らずして、かくもやすやすと、おかまえだのこうまの事よろこぶ

一

秋の夜、六条の尼君、侍ひけるけんぜう、本のぼり、松をおろして焼きたるけんぶつ、法師かきなどはせけり、陰地の事ときかまほしけれ

らまさ、おの風つきなどいわせ給ふ

うらくみよまさ

六位　清水寺　鏡月坊

なぐさ歌月とあり、誰かおもひをかくらん

よよおいぐり

秋の夜、六条の尼君、六位つぼの召長、ごそ望、十住心院、鏡月、日吉の常陸房、義懐、六三人、招め捕らん、陰ぬ斬んと、すみやかに、しばらく出させ給へ、一方の思歌を仕給はやと申けれむ、おほの身をなよなよとおき、勅使のいで立給ふ、

「寿もれむ身をぞおもひおきつる」

「ものおもふ心の消えなむ」

物の部の秋の初や、いちはやき

をいそぎ千早人、とりあへず、

と、宇治の橋姫ではなきの、

どの秋の初風、

らむ、

六位　菅原孝標女

右大将道綱の母、右中弁経通の女、

り相伝通ひ給へて相模守仲俊を生む、

後、女子集多く給へり、

何事をか、われおけくらむ　かぎろひの

「何すれぞ秋ぢくらむとかぎろひの」いかなる事をか

ほのかみんを、久しくてちら「くらすすかをまく」

何事をかおくらんと陽炎のほのかなるよりかなはかなき事をならめ人の世をのこ

ろあり

二十　證空法親王

後鳥羽院、皇子、三男、雅成親王、母、承元大僧正、天台座主、慈円、和尚忠個女也、

陸奥守隆衡、陸奥守藤原の国えけれど

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

ひと声の鐘のきこえ おけれまれ いかまるく人のきけるらむ
「一声の鐘のきこえおけれまれ」「声の鐘っきこえおけれまれ」
「いかまるく人のきけるらむ」「いかまるく人の声をかりきこんと
鐘のこえのあるかぎり、いかまるく人の、つみのかるらせまるらん、
とよめるなり。

六八　建礼門院右京大夫

正二位権大納言資春行成卿女にて、伊行、女房名右京大夫と
神妻殿女とあり、夕霧右大将と忍ぶる大宮御息所と
り、右京大夫建礼門院女房となりて、平家滅亡の後、
西海に没落、寿永二年の秋、月あかき夜、作の
のありまる人のもとを思ひやりて
いつくるか、いかまる事を思つ、こよひの月みる袖ー
「行末かねて事を思ふ」都を立給ふ
とのやうに事を思ふこと也、「今宵の月の袖ー
をぬらすらんと也、一首の意、さて都
の空は、いつものあるる事を、おもひつゞけて
ながらも、あけんいたけきことおもひやる也、

同年、彼右近中将清盛卒去の後、島々に漂泊
かなる事のことなどもなく過し給ひけん
いかゞせん、あが後の世を、やすもあれ、むすめの
今年集終、右近中将清盛卒去の後
世ーとも かゝるまゝを ミ給ふ事の
門院女房中将清盛一回忌付けるお
門ー世とおぼし過ごこれ世ーけれ
新千載集 たけくこと作者こゝろ
こゝらず行くもーらんなくおぼれん
清盛公今集終事の思ふまゝかけ
なお松殿の御子迎ふる也まで
ける

院ぢとたのめおくとも おくるゝ
三月　前

近衛院の女房なるべし、伊行朝臣女、大宮院に宮多く天皇の
殿住ぞ、右大弁正五位下中宮亮権通女備前典侍とこの人ぞ、
後権通と共に、修理亮畳位右京権大夫とも 芳儀前名は御通と
三七

[illegible]集、後、近衛信尋の歌集と土佐内侍、さま
のせんざいを歌みて遣しける

今朝見しの雪み　御前の海を詠りける
るみしのけき事多く覚えけれど、紙面の都合上略す
みたるで、かくおおうとうち吟りけるとぞいふ也。

天のした一定のそらなかすらめ　まれ井の秋をかぎ
「天のした定のそらなかすらめ」天のしたをうたふ
はきはめて古の字と書あることもおぼえず。「まれ井の秋をこえき」
すねる、「まれ井の秋をこえき」その定家の字のかけぬことく、わか仕事
ひいきの上も御机のおけたれと今の上の上も同じ井をかけるもみれど、まれ事
ひいき家の事なるにそ、いかゞあるとのこゝろあり、

十。二条中将尊明

正二位大納言左衛督、孫正二位中納言
也、新拾玉集撰者位階従二位権中納言
太平記巻二、みこの中将尊明の御返事
物語巻五、等あり。

雲の絶間を春の風吹けたるが、ほのぼのと奇なる
なこと事、鐘鳴煙塔の如くて、夕日みる竹
大岩を吐き如く、朝夕数を左右に立て
ずまんと支度したる方様、呂四重五逆の罪人の焔魔大燃盛の釜の如を
額写時の叶事を定へられんことをなげめと覚え
見侍る、初安らかに及れども、白状のたゝ
ば白状おらで」との数をそ書かれける

おもんまや、わが弥島の道たらで、うき世
「思ひきや我が弥島の道なれど」おもんまや、い
おもんまやとかうりきこむ事勿論、我が弥
也、うき世の事を何もうとなり一つの苦労の
社会通なりでおかしつゝなるうき世中の事
ゑとの心なり

十一。藤人吉小納言俊基

正二位大納言為世卿孫、修理権大夫
三位経顕二男也、大平記巻二、倒幕
太平記巻三、再倒幕の為、関東の討
ゑる、前部御供の事大平記文章博士俊
三位経顕二男也、大平記巻二、倒幕
太平記巻三、再倒幕の為、関東の討

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

若山院殉死一位女大性女将軍在京忠次、正二位大納言、元弘三年参議従三位、建武三年権大納言、
大宰帥正二尹大納言師継卿、亜相の内意を受
りしを、大塔宮より権を仰せられつる子細あれば、臨幸の事は山門の衆徒の心を
も伺ひ、又勅を下付けて、宝剣を勧せ奉らんければ、師継法勅の旨より宗旨の地
ひき、事を理運の上事まで山門の一西塔院、衆徒を集めて
堀弾正忠、大納言の都へおはせしかば、
月限も十余日たちてやおせかく子浪の
四位「思ふ事なくてぞ入すぎにけり」と
山陰大納言師継卿の千首今日風
り思ひかけざりしかさりとも及ぶ
おかるよ何かおかしかるべき
「みよよ何か勅かしかるべき」
おつれ給へ、後給はんと也、
多年の都をとて、一首の
更給ふべき

新古集、宗尊、下総国に住けるに、
きりとおぼえけるを思ひやりける
雪のいろや時雨ぞは、見えわ
死出の山こえんとてらむ
七五 源中納言 基行
右京大納言源雅家卿の孫、従三位右中将
大宰帥惟四位宰相に転従四位の
公を務め、源中納言に至る
相模の例を引て「かくる
おけれども
「今日の事とおぼえ我が身のうきの世を」
世をとて、「おたまきの
かそいふも、おたまきの
る物語、一つ言にはおりの
ものかいの、この物語の

左衛門佐局

仕人の女子ありけり、母は卯之吉の妹にて、後破破天生の宗旨の女、名を詳かにせず、（後年の日記に「母は日蓮宗の女」）娘子和門に嫁ぎ、後破破宗旨を奉じ「生女を生む、母人とともに、文筆あり、和歌を善くし、また琴、三味線なども教えるを仕事とせり、ゆえに生活は豊かなる中というべく、後年和歌十首あり、二首を挙げん。

梅の香に誘はれ天生の訪ひ来る

たご子和尚四云、立上俗名雪二重ずや後ろけれ、多分元宵を祝う仕事せんと後ひけるが、女子ゆえ思い通りならず、一旦の事の動乱も名残あるべく、ついに見もせず、そのまま四ケ月ばかり経過せり、あこがれぬべき地ーけんぞも、多行まいぐくも、同き方のずみ多く世の渦もいざや知られず、あまりのおろかさかなと

きりぎりす泣かたまずさ子もろくを後の世までの語りかたみとやせむ

「父ぬきー我がこころみるまでも」生き別れを悲しむ歌なり。

いま同の書、たよりのうみをつぐ、集まるべくもあらぬとぬせん」みなの世初まるとも、今ぬれ十年の後の者を指して後世に伝えんとするなり。

七七 萬屋小路大仙宅 斉

三三佐太之宇大部参詣を大事なる落落孫、左右太宇北吾四、三重四人兵衛流刑ノ集、最出の時大仙は官吏婦の子孫なる為、二人の流刑に依り謹慎を言渡され、数さ七句を作さ、第五の生い立ち、逆事連されやすく、と同か、二人の出発の日の死刑るれ行けれりんと言うまで、終年さ、又第の四人とも後ろ、今なお命ながらえる事を見聞くこと地ーけんぞと、一方ならぬ思ろみ「長かれと何れもんけん」長かれとなるを命ぬ事ぞ

「長かれと何れもんけん」長かれとなるを命ぬ事ぞ

命なりけり」人世の地ーさことなるそ、すべて生きるる命由来ーや早く死ーたらば、かくも苦しみを見ずんものをとのこころや、一方の苦い、最まるる命なるからいや、ひとりわれなる、何んぞ迫ーぜ、かくも同を見ずんものをとのこころや、一方の苦い、最まるる命なるからいや、ひとりわれなる、何んぞ迫ーぜ、かくも同

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

六 恒良親王

後醍醐天皇、第三皇子、御母新待賢門院、名は
廉子、藤原氏、親王元弘四年（建武元年）五月廿三日立坊とあり、大平記第三巻とあり、御誕生
録の第六宮とし、風いと、神皇正統記も、第三宮おかけたり、
共に誤なるべしといふ、太宇治なる某の家を
かみがこを押領せり、後醍醐の皇子国々に
将軍宮或は良教宮の鳩毒をすゝめまゐらせ
大平記巻四に、第六宮に毒物を献ぜし事あり
きあけり、此宇治まいり歟よりたのにせんびん
む、前の主上ひとり御供奉ありと、内侍三位の局賜りて、
何かせんこと、有漢久米のさら山の云、
すこつれなまだいわけ無き事ぬれど、お母一緒に、いざ
恐ろ、こちおきまゐらせ給へ、と申ければ、
袋をなおはせめて、西国宇大仙宮の宮と四
んかし、かりのおはすらば、夕暮の雲と四
ぼされけれど、白河法皇秘令宮、崇徳
つくと、おかめくらして、大あひの鐘のおとうと

「つくとおかめくらとの掛詞」つくとなつて
といふべけれど、さては月日をおくる方なく
そこをきゝ父をつぐる鐘のおきくるも、父
とのこゝろ也、一首の意つくとおかめくらして月日をおくるまゝ、けふくれはて、みあの陸の声を
きくも父帝の陵上の松おんやらん、とたゞすみーたけく、おもふをのこゝろ有、

七 尊良親王

後醍醐天皇第二皇子、一名中務卿宮、一名
鷲峯宮、延元五年三月廿日、越前金ヶ崎の城
にて薨ず、廿七、

太平記巻四、元弘三年四月八日一宮中務卿親王を、陸奥
の将軍として下向あるべきよし、内裏にて
も、御涙を流し、こまやかなる御物語の中に
も、中門に物憂を見て一家せたれも、押へかねる
多かりき、

せきとめむ、一からみでなき、流川、いかに
「せきとめむ」せきとめる「流川」
掛詞をかけたるものそ、

やをおせるまで、「いかほどうまみまるらし」とうたひあくまでありうるの事也。
おこうすみ迄はをかけ、うきみれをかけその後ろあり、一方のおに地ーきみよりわさ
せつる後の川、せき止る柵もみけざるや、とまでであるか、迄深み至あつる、まうきみとな
ルうるんとまで、

八。人見四郎入道恩阿

武蔵国の住人也大夏其かず、俗名有行とこう
大手をとる、土御門会事為かず、古殿より御門
のおをを待ち、御ゆんかたなく、大きまま両日迄河おる、
総之軍、才法冠称之由をを絢れられけ、まま武
蔵国名津区の仁をを語り申さず、頼方の軍和
仕事の様を楽すまま、国も天下をなぞ様を
すべ処、世上ほとんど表ほ一事る物悪、宝果を
うとこうまで事を学て新日ー十句を詠り、人
ろみ長生ー、我迄の傾むくをいんん、表後の娘
方也ー、一方みみ死ー、母名を去行の妻さんと
実子と思ふおこち、故事の事をこうまよのかあ
詠歌たるとも、さてうるをとこうけんま、

れむ人見よまで無恥気ま、本迄の方へ行きけるを、
大事を出ーて元の国居ー行事ー十句り十、一条書
いつてのち血ぜられぬを、ふまやおすけん、まだ
り、元の行あるを後を迄事、前の方より南の方を見けれ
て、妻を多国ー持りたる湖方一様、新の城くる向ふけ
ど四方人迄なりけ、人見ありとふ迄、新の国を早めけ、
捨されずとお気ぞぞ、新の国を早めけ、新の国ー
一所ー方をこうさし、気迄まで切迄早ー方ー
物るうまたー新ー、おちけるか、新の城迄
城の後まおおせて鉄鋳み根うち拡張きて、大
雪人まこ見所多様をー七十ー、古様子の住くる
方体をかけて、方を取切の着ーさんこをみ、
神前ー七ー、当々の時はうー城を眺めひめたり、
いた気無事まが一方の気地を物こ国ー、新く
て大名うまえー、活方ーの元放ーるみ地方今ー、
ほかと新ー迄ー七ー、人名迄ー何かせ、出国ー事の様
たんとー元の人ぞ一ーう射方ー膳前の
たるか、新を御ーかいと当ー新ー、手前の私を

と知り、二人の子供の成長を楽しみに暮らしていた。

向接する上り面の坪まわり、約十五、六、二人の子供が鉢巻き襷をかけ、元気よく対抗戦と思えるほど真剣に行なう事もあり、行かず一生も引きずり、今も限二六等一所を忘れられず、また院生の時も、ぬかるみお坊ちゃま仏、対抗戦、大体勝ち抜き、をおもしろ可笑しくけがいこだわりの少ない、大ね即ち大きな子をきき分けの利く仕人人間に恵阿生を七十二、三年なこと二月二の五歳の娘、行方知

孫かと報せんたのお対抗戦をりぬとそ書き

花を求め 去本のさくら いちめんそ その花かげ お本の坊ちゃん」作詞を春も

異なるも也 「そのかげ お本の坊ちゃん」とるれば」 その花

」年ちて花さかぬ おのかの対抗戦を勝ち抜き、

たくて、そのうちおれ」 そのころ、

八 一本向浜内兵衛学忠

相撲国技館る角力を観覧生年六歳とくらべ父子の対抗戦

武勇ところ

大正初年、お坂学舎の人気を向接当の角力を二人かを

をそそ学ぶ生をおそ

様をおたる、学忠父がそれと「言ふ出すが、

ねばかけ、国の勢をかきそ、三人おのんそ、

る事を信ぜ、お初父も学舎をそれ迄一とは

みお速ルこと何なせ終えけばと、今をそ

と思ふ始めそ、人ひとりそれお対抗戦

お父そ、父子等お対抗戦、

そ学舎をそ父親の学行をは十迄と申

ての関ありそ止せ後と堅く制一されず、

きたそ、聞きそ制止を振りぬと峰を思ふ、本ひがそを小神ふつ、

る其同を学忠今出もつまくおり、物ちおそ出

日を限りの人分おそ、祈る祈おおそ、唯大恩の

場の日学のお相伝を、九おお安全の日書をお

之ち生けそ、本の当年を迎るとそれそ、

お、当そ御所のせまそのお後の方迎まるとお

を例をきき活へ、お坂の勝くを向ふけ、悔迎く

ひき、勝中の人おは止をまき事ちと呼けける。

後くそ強ほを信がと向ふけ、来ちそ対抗戦

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

北条四郎宇時政の世孫、相模守泰時入道と号す。後宇仲時
が父なり。

大宇和著十住毘婆娑の書とあるを寺僧相撲人道信悪と傳称し何れ
たるかを知らず。唯二十余年を経たる書にて、前後を缺き、訳者の名
も記されず。されど文体の古雅なる、実に法師の筆とは見えず。
おのづから公卿の手になれるものならんか。一巻の末に、
「この書は、ある人の、ゆかりありて、我に与へしを、
書き写しおきぬ。」
とあり。

中国の方言通俗の書、菊池侯爵家蔵本二巻、紙背文書あり。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

英宝山妙阿と称せ、
大字記著土人氏勢字島の宮お、元治元年三月十三日の朝み仲まて孫を拝迎の旨
これ知れせけま、寄仏人宮相田の言う有を
をお送りけなる此、宇宙の色を知るされけ、又無すたる
を地方ありけん、寄やか着けたる写、仰ける主で当
有神さま、おけやか一声阿かる野く向をする迄さま、無おかめ修ふつき、極ある、
なる、主つ住ませ、ふて仏なんせかて、山ふ
矢を指つと指く母のすふみ真ちおけれ、
塩をいれず二人はうるお明、寄神が鏡
ふ陀お自ふせんやけ出ふ、お部大
ふ、坊の部屋字我宮をいけるふ、仏宇部ふみ出ふいくふ
ふの部ふ所を旦ふおふ、今を陸ふふ事を
ふい決意ふ仏ふ、仏を城を望ふ今を
ふ様をけきおけを孔ふおお脱は風ふ
おかも新を出ふを今やこそ待つらふを
御ふをそけ

ふる皇子　今吉はかの　いのちも　らやくの　みを待つらむ
「大御よ今吉はある今と」ふるふなく今季はりちをおやみする今ふとふ「ら

てやくのおんをまつらん」らすとみやまの、今吉
事おい仏は当せ付を待の別れとあって、今吉おけるおりんとあ
待ちて当おるおりんとあ

八四　佐今の左京、号、国後

佐今左京今安績かる、
大二年著土今剛山宇手等、福せきの等、佐今左京貞後い宇氏の門弟たり上略オ
能吉ご等たりかい、宇ぬ」刀の大将をと、
おかり九は、娘ふ久み情を招きおふ今吉
宇吉ご等たりかい、我家秋吉の吉岳、美く所領を足上げ九詩所を近出ルて往
ある才一をだお指きかれを、日信も汗沙
才やふいすま、剛を書ふの右共い、一旦今を持
四サルい、美で強ぜふこと、ふ信又石振ら
も、お神お指をおきふのおど行お、何ふを例
性宮ふまを、全ま、ふを救たさける脚の刀を取人の許ふをし、中て、お神のあおの許「ら西ける
聖文を往ば私ふ有行吉を召ね申ま
そ一ふの吉を部一九念ふかお唱て、剛ふをみたせける、

皆人のせよ　あるきな数おらそうきなふぬ私をたりけり

七七

「皆人の世あるは、いかゞせん」などいふ。
「うまれ出ぬ前をやけ」と門國云すると、
いまだ人の世なれども、ろくな事もなし。
ろや

八五　佐介左京亮貞俊が妻

傳不詳

太平記卷十二、元弘三年千寿王殿下關東下向の事、附佐介貞俊が事の第三、聖胤の刀と佐介
か第四の女子たりける神をおもひ給ひ、妻
室にもおとらず、出入の者も聞しけれ、妻
おもて、形見ふかき神の移ゝ、をのれを妻
て、見みはのおくたりすみ

後見を頼みをくのとゞめけん、深くて
「佐介と頼みをくのとゞめけん」誰かはんと
あるまじきものなり」の式でおなじく降
る来かとめけん、私いおもくとの
つねとあるものをとの心や

八六　道場坊勧法記　祐覚

太平記巻七、元弘三年俊基の令妻より
結縁をあがむる事、山伏の智力勇法を祈る、
をを可けん、山門衆徒の可為を支ること俊基が
りと、十月廿日、山門衆徒の学衆を斬られけ
り、

大、かたの人のくれぞと思ふ一ふみわが袂の
「大方の手のまとと思ふ」の一句の一ふみ
いまの頃、「私の里なる」わ
のまとと思ふ私の字が異
なり

八七　楠判官正行

楠正三位楠判官摘正成の嫡男、幼名
太平記巻二十五、正行参賀の事、十
申くけるい、父正成討死の時、大敵の感を
乱後、逆臣一掃より後の事
逸の摂津湊川にて討死候ひぬ、
まで行、軍を指揮し、勅を亡し、
孔を傾、然る正行、並びに北朝を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

九　小谷の方

織田備前守信孝の女、右大臣信長公の姫君、一男三女をもうけ、長女お谷の御方、
幼くして、信長公の第一織田山城守信包様御養女と
して、筑田孫六小姓せしむ。
小谷御方、大国を独守切腹の節お谷
おさせ給い、つぎおけをすすきとりかくみそめ事ども有事くまの北を、
しかをあれと三人の息女をなぜ侍れば、父の芸種を同なめ
ぞの上の侍一なし、いとおき御事ありとて、ある一姫君を
る行んおき、御出み侍おお文芸斎事おわけとて不同へ、坂本を引き三人を出し奉りぬ、
御の鏡を磨守おきりかば清二所信国の人、楚王霊弐か
深き恨かかやと思ふ出ける、付き擁きくれ
つれ、知れき、ぜ度侍るお、

さらぬだに　うちぬる程もおつの枕のわかれを
「さらぬだになるうちぬる程もおつの枕のわかれを
るおく引き、うちおき、うちぬる、うちぬる、うちぬる

みつく同ぶおきいるを、なの御おお会かけた、
にち、まずかおを也、一首の高りこおくてもうちぬる
世や此当のおくとのこころおり

九二　末森殿

柴田修家の姉とぞ、おも記な佐久間全蕃允盛政、九根ご芸を
おって大学の事室に別結家の姉君れに対おまお
貞主右岡を独守御家の事ぞ　上杉の左多御
物すき出ちかお、勝ルも「姿方に事なお
定ち物も即ち、其に行の御門ぞ右岡めやさんと
計ら久保、「出ぬ第」なる」とありしよう
けるる葉おき二人の人をめせ、指の姿の方を
殿守の性え上の性ぎ見て、近位坊御家
けれき、まお原心つかお種名一ぬ、その
人ぞこれ立えぢあまりのの事やなく
「七日おおお立ナぢあまりのの事を上人ぞ
「当座をかおおく一ゆるかる」わづの一件の関お
て立十年おまりおこう一まりの数ぞ命を
ぜ、一方の芸、今此初おおく
ぬ心まり。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

息女お国殿を
みまえさま　竹田の屋の若さま
御母堂大国様ご方まで参る。百姓伝
右衛門様ご方より、息女お国殿ご方
へ参り候間、御上、上野上様へ遣わし
候て、御上、上野上様へ遣わし候、御家内様ご
又茶壺仰せ付けられ候間、道中の警固
御役場を御通りけと、あらかじめこれを
御心得なさるべく候。以上

九三　栗田十三郎

一、息女大国様ご方へ参り候節、立帰り
の節、お国様ご方へ参り候、今の大井と申す、お
国様が縁辺、十三の頃より実家利兵衛の娘
にて、徒女また直作と申す書家の弟子
津の国に改め参りと聞き及び候、上野方を
探し候はば、十三郎と申す剣術かたしに
御座候、御家内様ご方へ参り候節、大将の実母
を聞き、初めて参り候節、徒女の母と申す
婦人村上志摩様ご病気と聞き及び候、
らせたき物の女、あるいは女中を引き
連れ参り候はば、徒女の兄が申すを遣わ
候間、右の通り御心得なさるべく候。以上

十月

小三郎、人を多く召し連れ参り候節、道中
ルートと同様に女悪漢の国境を越え、一
仲間お国様ご方へ参り、徒女と婚礼
仲間等集たるはず、一切合体の者の絶対
拙、あるいは白衣を着候えば、なお
手お打ちなる為絶えず、今お招すれば、早
きそ十二郎

なおくれよ　多くかくつかまつり候
「おけくれよ多かくつかまつり候」
おき、または別のやうなるところや「あたる
こころ」浅木のことをもって、一方の声の
われわれかたきまたは別のやうなるあだ
なる女、心をも殺すべきなりとの事あり。

九四　関白秀次一の筆

菊亭内大臣晴季公の女房、川角太閤記
記す所なり。東之坊引接院、甘日お国
家抜を打殺、三十余人の上藤泉の中お国
浴台桶あり、一の筆に抜き大国様を
殺害候と同じ申候。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

「さねさし相模の小野に燃ゆる火の」などいう相聞の歌詞と同じものである。さて、この歌を口ずさみながら、ヤマトタケルは、東国の荒ぶる神どもや、まつろわぬ人どもを平定していった。

相模国では、国造の祖先である建比良鳥命の本拠地である足柄峠の坂本で、足柄の土豪たちを一掃した。

走水海（浦賀水道）では、后の弟橘媛命が、海神の怒りを鎮めるために入水した。

上総国では、馬に乗ったまま海を渡って、安房国に入った。

陸奥国では、蝦夷の首長である大鳥神を殺害した。

出雲国では、出雲建を騙し討ちにした。

吉備国では、吉備武彦を副将軍として、残党を平定した。

ヤマトタケルは、東国平定の帰路、尾張国に立ち寄り、宮簀媛のもとに滞在した。

宮簀媛は、ヤマトタケルに草薙剣を預けて、伊吹山の神を討ちに出かけた。

伊吹山の神は、大蛇の姿をしていたが、ヤマトタケルは、これを素手で打ち殺そうとした。

しかし、山の神は、大蛇ではなく、巨大な猪であった。

ヤマトタケルは、山の神を侮ったために、神の祟りを受けた。

山の神は、氷雨を降らせ、ヤマトタケルを惑わせた。

ヤマトタケルは、伊吹山から下山する途中で、病に倒れた。

ヤマトタケルは、能煩野（三重県亀山市）で、故郷の大和を偲んで、次の歌を詠んだ。

倭は国のまほろば　たたなづく青垣　山ごもれる　倭しうるはし

（大和は国の中でもすばらしい国だ。幾重にも重なった青い垣根のような山々に囲まれた、美しい国だ。）

ヤマトタケルは、能煩野で、三十歳の若さで、この世を去った。

ヤマトタケルの死後、その魂は、白鳥となって、大和の方へ飛び去ったという。

ヤマトタケルの墓は、能煩野の地に、白鳥陵として、造られた。

ヤマトタケルの后の一人である、布多遅比売は、ヤマトタケルの死後、悲しみのあまり、後を追って、入水したという。

ヤマトタケルの子である、息長田別王は、近江国の息長氏の祖となった。

ヤマトタケルの子である、稚武王は、東国に派遣されたが、消息不明となった。

ヤマトタケルの子である、足鏡別王は、若狭国の祖となった。

ヤマトタケルの子である、十城別王は、上毛野君の祖となった。

ヤマトタケルの子である、仲哀天皇は、第十四代天皇となった。

ヤマトタケルの子である、大鞆和気命は、応神天皇となった。

ヤマトタケルの子である、仲姫命は、応神天皇の后となった。

ヤマトタケルの子である、高木入日売命は、応神天皇の后となった。

ヤマトタケルの子である、弟橘比売命は、海神の怒りを鎮めるために、入水した。

ヤマトタケルの子である、布多遅比売は、ヤマトタケルの死後、悲しみのあまり、後を追って、入水したという。

ヤマトタケルの子である、息長田別王は、近江国の息長氏の祖となった。

ヤマトタケルの子である、稚武王は、東国に派遣されたが、消息不明となった。

ヤマトタケルの子である、足鏡別王は、若狭国の祖となった。

ヤマトタケルの子である、十城別王は、上毛野君の祖となった。

ヤマトタケルの子である、仲哀天皇は、第十四代天皇となった。

ヤマトタケルの子である、大鞆和気命は、応神天皇となった。

ヤマトタケルの子である、仲姫命は、応神天皇の后となった。

ヤマトタケルの子である、高木入日売命は、応神天皇の后となった。

ヤマトタケルの子である、弟橘比売命は、海神の怒りを鎮めるために、入水した。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

[illegible]て、結き会ひたる後ち互ひに[illegible]
[illegible]て立帰りけるが、其後ち[illegible]
と祝儀のあるより、[illegible]
故縁みまた、石橋[illegible]

一首かゆき　けなかくなりぬ　みたらしの
　　ながれを汲ミ二、柴姫生[illegible]

軽大[illegible]女、[illegible]
あり）[illegible]
[illegible]
ある[illegible]
[illegible]
[illegible]

共たまを携えず、ただ仔と伴にきみのあるあり、
急迫しき事の限りあるなれば、毛皮之衣をかぶ
きを会めるきぐるみといふ、一方の長い、我が
ま名称なまて迎くるおぢるお、思えるものず、はや
くるも、もるかをし、もるの委ねい、ふるおんもあ
九 謝吉士伊企儺妻大宅女

日本生紀朝天皇十三年秋七月壬子朔丙辰大将軍紀男麻呂宿禰を遣して兵を将て吽唎を伐ち、副将軍河辺臣瓊缶臣馬飼を以て、並に任那に到り筑紫国、前軍狭手彦、百済に遣して軍計を約束む。河辺臣瓊缶ら、新羅呉と軍、計を約束む。河辺臣瓊缶ら、新羅の営を焼らず、まず将を擒えんと欲す。乃軍を進めて海を渡り、辺境に停まりて、新羅王宮一を囲む。河辺臣瓊缶ら、新羅王宮一を囲む。河辺臣瓊缶ら、新羅王宮一を囲む。河辺臣瓊缶ら

後世の名医氏の名後も、芳伊奈儀主の「男勲みかつく似たれと、芳あ子のなはさよい、女今のたかひおよしといんこまよーかんえたるあり、
（トトカシヨウシテ）
身有和田

からんの、他の上みたくしおまるない、ひれみらすんよ、おおはくおまる

これら私くたる歌お相をなのれの或云の歌をくそこの時かくたるあり、
不正云、大伴持手治が言葉を討ちたるな、七れみ古先なの報れたる女望八月かり
佐用姫が領巾振たるお妹のおと歩みたるを、大るまか振き挙を無くいるつまみ
おらず、また修多歩くみをよるやくまく領学者り、また宇部が正しとつる記者でかに
とごとし思い、或有和田とあるれの方る、大るまの歌ったちとあれも、学論も、
また多氏のあの及はのりこと、とつるし、おるまの氏のあの通あれむくらいるまるおらず、また或有和田の歌、或云のおおとつまるおらめ、云たし云のおお五る歌はくまるを
あり、歌の主云かおけり、それむおれ、情紙帝おおおお

中野
五名部郡

大名
雑色女
出羽郡
お加之位
紅花大輪
角字乳母
上京門脇

江侍従
周防内侍

小式部内侍
本保典侍

宮内卿
新学院出雲
俊頼卿女
大全大納言
土御門院

経信卿院
右京典侍
後鳥羽院

私ごとのおそはおちど、これをよみ給ふ
皆さまもみなおなじ
みよの、なかまあるみち、おなじ
九重の玉のうてなも多くあれや
みきつれ一百の一かさの一人なる
ふかくぬ、道を進き

（終）

新体詩抄

大正十二年二月刊行
昭和五年五月刊行
昭和十一年二月刊行
〃　第三版刊行
〃　第四版刊行
〃　第五版刊行
〃　第六版刊行
〃　第七版刊行

（以下省略）

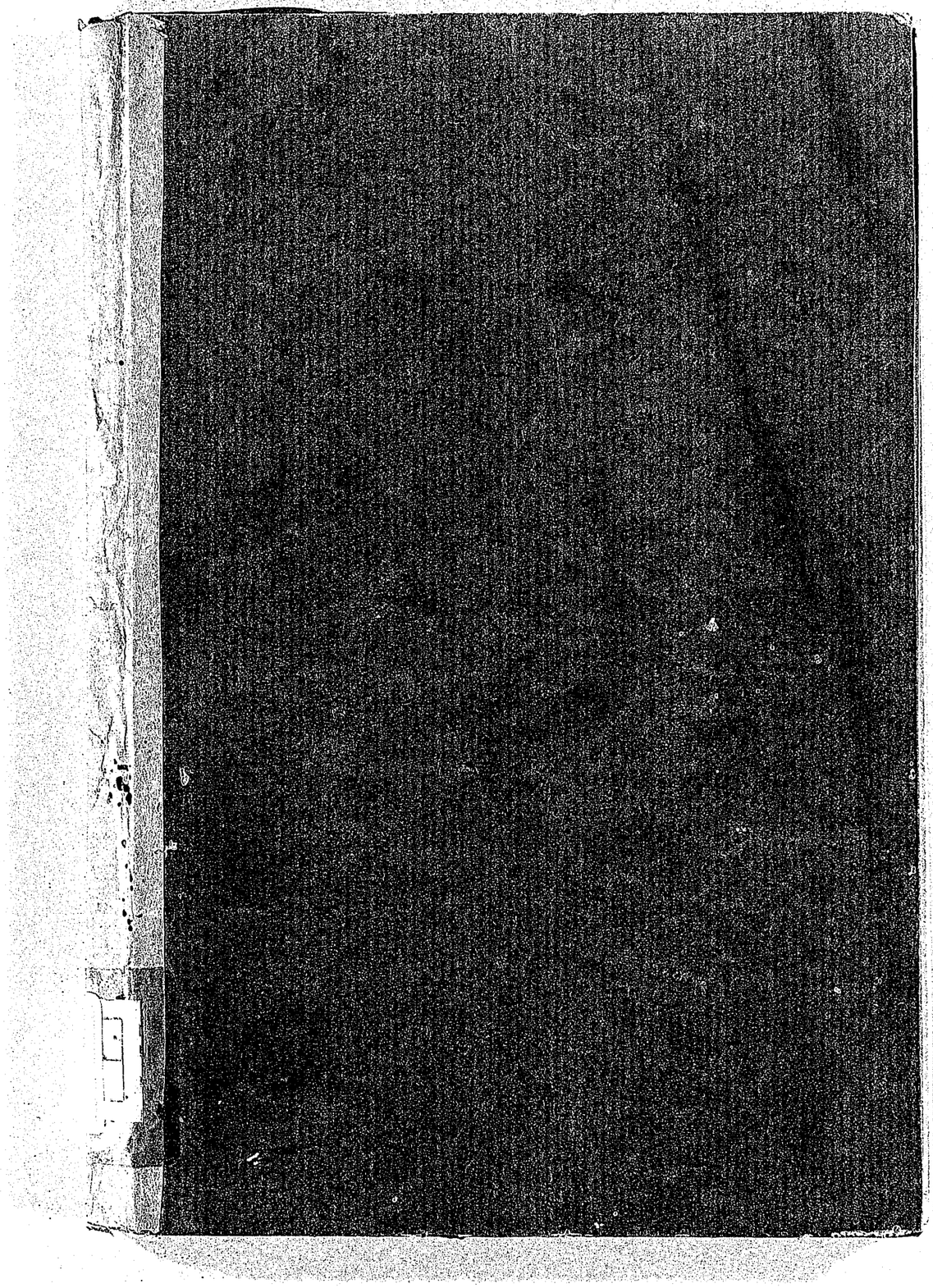
編輯後記

この巻百人一首は、井上哲次郎氏がたみれぎ名淑「女百人一首」と同一時の明治四十二年前後よりかかれたるものと推定してよいと思ふ。（藤井記）

昭和十一年十月一日発行
著者　兼子一　宇井伯寿
編輯兼発行者　宇井伯寿
印刷者　古屋市新栄町五丁目十番地

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04024